

ヒメトビウンカ幼虫に対する本田散布のイネ縞葉枯病発病抑制効果			
[要約] イネ縞葉枯病の防除において、ヒメトビウンカ第二世代幼虫を対象として、幼虫発生盛期の始期～中期にシラフルオフエン乳剤を用いて本田散布を行うと発病抑制効果と減収軽減効果が得られる。			
農業総合センター農業研究所	平成26年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

近年、県内でイネ縞葉枯病の発生が増加傾向にあり、県西では被害も発生している。本県の奨励品種のほとんどは縞葉枯病抵抗性を持たないため、本病の媒介虫であるヒメトビウンカに対する薬剤防除が必要である。そこで、ヒメトビウンカを対象とした本田散布による発病抑制効果と減収軽減効果を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 平成26年の筑西市現地圃場における無防除区のヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生盛期は、6月23日から7月8日頃である(図1)。
- 2) 幼虫発生盛期の始期(6月23日)または中期(6月30日)のいずれか1回本田散布(シラフルオフエン乳剤、商品名:MR.ジョーカーEW、2000倍)を行うと、無防除区と比較してイネ縞葉枯病発病茎率が低く抑えられ、発病抑制効果が得られる(図2)。また、幼虫発生盛期の終期(7月8日)の本田散布では、発病茎率が無防除区と同等で、発病抑制効果は得られない(図2)。
- 3) 幼虫発生盛期の始期または中期の本田散布では、減収軽減効果が得られるが、幼虫発生盛期の終期の散布では、減収軽減効果は得られない(図3)。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、平成26年に筑西市の現地圃場(品種「コシヒカリ」、5月14日移植)において行った試験の結果である。なお、育苗箱施薬は行っていない。
- 2) この地域におけるイネ縞葉枯病以外の病虫害(いもち病、イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ等)の発生量はいずれも収量に影響がない程度である。
- 3) ヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生時期には年次変動があるため、発生予測技術との併用が必要である。
- 4) 試験に使用した農薬は、平成27年1月1日現在、水稻に登録のある薬剤である。

4. 具体的データ

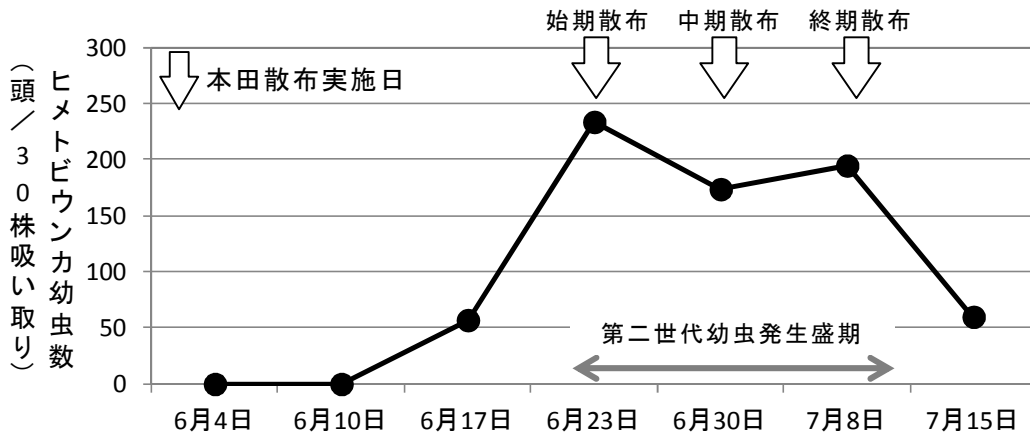


図1 無防除区におけるヒメトビウンカ幼虫数の推移と本田散布時期

注1) 試験は、筑西市において品種「コシヒカリ」(移植日: 5月14日)を用いて行った。
 注2) 散布は、第二世代発生盛期の始期(6/23)、中期(6/30)、終期(7/8)のいずれか1回行った。
 注3) 調査は、バキュームブロアを用いて各区30株で行った。

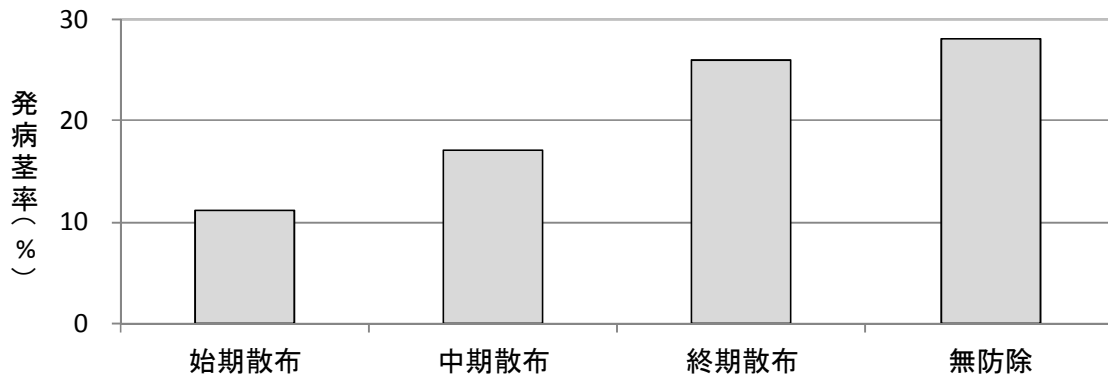


図2 本田散布時期別のイネ縞葉枯病発病茎率

注1) 試験は、筑西市において品種「コシヒカリ」(移植日: 5月14日)を用いて行った。
 注2) 防除薬剤にはシラフルオフェン乳剤(商品名: MR. ジョーカーEW)を供試し、始期散布は6/23、中期散布は6/30、終期散布は7/8に本田散布を行った。
 注3) 発病茎率調査は8月上旬に行い、1区25株(系統抽出)、3反復で行った。

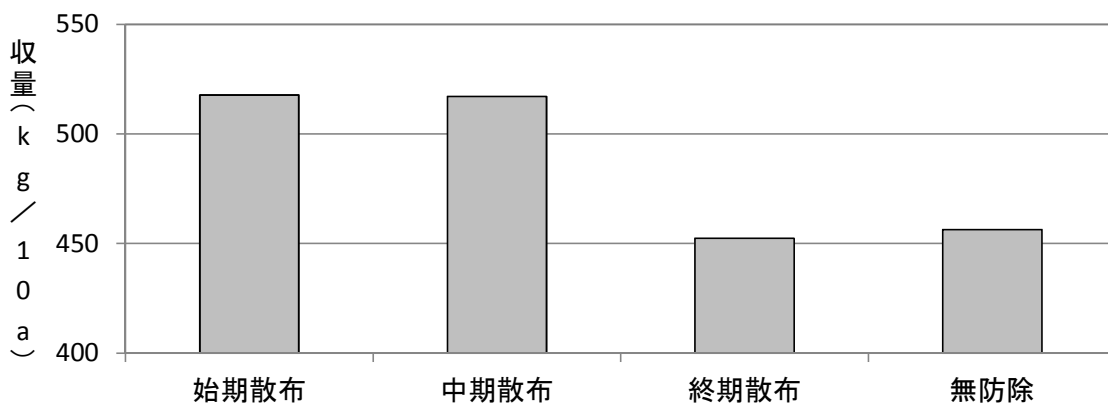


図3 本田散布時期と収量の関係

注1) 試験は、筑西市において品種「コシヒカリ」(移植日: 5月14日)を用いて行った。
 注2) 防除薬剤にはシラフルオフェン乳剤(商品名: MR. ジョーカーEW)を供試し、始期散布は6/23、中期散布は6/30、終期散布は7/8に本田散布を行った。
 注3) 収量は、収穫期に各区中央の60株を刈り取り、精玄米重(1.85mm<)を調査した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

農作物有害動植物発生予察事業・平成26年度・病虫研究室